ダンス・イン・
ザ・マフィア　６

ダンス・イン・ザ・マフィア　6

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19056167

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, もぶおじさん×霊幻

誰得？俺得！なマフィアパロです。師匠総受けです。暴力描写や殺人描写を含みます。今回はもぶおじ霊と芹霊（本番なし）を含みます。お好きな方はよろしくお付き合いください。倫理がアレ。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ダンス・イン・ザ・マフィア　6

「危険すぎます。俺はアンダーボスとして、流石にそれは賛成できない」
ネオ・チオード（爪）・ファミリアの重傷を負ったボスのショウ君を誘拐して、逃がし屋に渡して失踪させる。
そうしたいんだ、と好きなジェラートの味を打ち明けるような程度の躊躇いで、霊幻はアジトに雁首そろえた幹部達に意志を伝えた。
「モロにネオチオードファミリアに喧嘩ふっかける話ですよ？それに、何処にショウ君がいるかも分からないのに……」
「ま、ドンが入院してる病院を公表する馬鹿なファミリアなんてまずないからな」
くたびれた顔のエクボがあくびを噛み殺しながら言う。霊幻の無茶を聞いた瞬間から、エクボは反射のように情報集めに駆けずり回っていた。
「コンシリエーレも止めてくださいよ。カチコミの中でも聞いたことないレベルの難易度ですよ」
泣き付く芹沢の声に、ふむ、とエクボは顎を触って霊幻を見る。
「もう霊幻は止める気は無いからなぁ。俺様には止めらんねーよ」
「コンシリエーレ……！あんたがそう言っちゃいけないだろ！」
『相談役』（コンシリエーレ）のエクボはドンがめちゃくちゃを言い出すような、こんな時のためのファミリアの舵取り役なのだ。
――世間一般的なファミリアでは、だが。
「おまえたち」
口々に危険を唱え始めた幹部が、霊幻の声にピタリと止まる。
「おしゃべりは終わったか？」
ふわりと美しく霊幻は笑って見せる。
「俺は」
霊幻の唇が動くのを。
「ショウ君を」
コンシリエーレが、アンダーボスが、５人のカポが。
「助ける」

絶望的な気持ちで、見つめている。
「返事は？」
こてん、と少し首を傾けるドンに。
「「「「「「「Ｓｉ、ボス」」」」」」」
その場の人間が皆膝を付いて、応えた。
（これだ、この威圧感だ）
跪きながら芹沢は脂汗をびっしりとかいて思う。
（情夫上がりの悪知恵が回るだけのドンが身にまとうものじゃない）
芹沢は霊幻の実力を知らない。というか、エクボと茂夫以外は、霊幻が以前のギャングでした事を知らない。だから霊幻を色仕掛けと悪知恵だけでのし上がった……と、思っているし、霊幻もそれを否定しない。むしろ肯定する。
（ときどきこういうことをするから、『伝説の暗殺者』なんじゃないか、なんて噂されるんだ）
「まあ、顔を上げてくれよ。『親』の言うことだからって強制するのもな、納得がいかないだろ？だから説明するわ。まず確認な。俺はお前らにショウくんを助けろって言ってる訳じゃ無い」
ざわ、と幹部が動揺する。
「俺が助けに行くけど、了承しろ、って言ってんだよ。そのせいでネオチオードファミリアと抗争状態になる。それで迷惑かけるぞ、ごめんな、って言ってんだ」
「ドン自らですか！？」
「そー。あとはエクボと、芹沢と……モブと律とテルくんも連れてくかな。火力がいるかんな。後はサポートとアジトの守りを固めるのに集中してくれ」
「そんな……危険です！せめてもう少し人数を……ウチの部下から手練れを手配します！」
我も我もと増援を申し出る幹部に、うーん、と困ったようにドンが指を口に当てる。
「そいつ、エクボより強いの？」
はた、と幹部が黙る。
「気持ちは嬉しいけどさぁ、エクボと同程度か、エクボより強くな

いと、正直足手まといかなあ。葬式代を増やすだけなのは困るのよ」
スペシャリストのエクボより強いソルダート（兵隊）なんて、こんな田舎のマフィアじゃあまず抱えていない。
「……ド、ドンは、アジトでお待ちになられるのですよね？」
大きな抗争の予感に心臓がバクバク言いっぱなしな幹部の１人が安心したくて口に出す。
「いや？俺も現場に行く。万が一失敗しても、俺がいりゃあ『見舞いに来た』で誤魔化せるからな。あちらさんのコンシリエーレは老獪でこの世界に精通してる。話はできる男だ」
「しかし、ドンに何かあったら……！」
あ？と間抜けな声を霊幻が上げる。
「おまえね！笑わせること言うんじゃない！」
あははは、と一通り笑って見せて。
「人間誰しもいつ死ぬか分からねーもんだぜ？ましてや俺はマフィアのドンだ！」
霊幻は立ち上がってコートを翻しながらくるくると踊ってみせる。
「見えるか？俺をエスコートしてるのはいつだって死神だ。気まぐれに口付けられれば──」
突然撃たれたように身体を跳ねさせた霊幻がステップをもつれさせて床に倒れ込む。
「「「「「「「ドン！」」」」」」」
「まあ、地獄に駆け落ちさせられるわけだ。お前ら俺に頼り切りになるなよ？孤児院で教鞭を取ったり、娼館の給湯器の修理ばっかりしてるから忘れてるかもしれないが──俺は悪党だ。いつ殺されてもおかしくない大悪党だ」
芹沢が差し出した手を取って霊幻は起き上がる。
「いつ死ぬか分からねーから死ぬまで好きなことをする。俺ぁ気に入った子供に玩具ばら撒いて菓子口に突っ込んで死ぬんだ。生まれも育ちも選べないなら、今日何するかぐらいはテメェで選ぶ」
立ち上がった霊幻の服を芹沢がはたく。
「お前らもそうしろ。俺のこのやり方が気に入らないなら独立しちまえ。止めねーよ」

幹部たちが目配せして、おずおずと前に出る。
それぞれ霊幻の靴に口付けるのを、霊幻はつまらなさそうに眺めていた。
「……ドン」
１番古株のカポが、立ち上がっておずおずと霊幻に話しかける。
「我々は、あなたが思っているよりも、あなたという人が好きです。愛しています。あなたは自分で思っているよりも、我々の面倒を見て、世話を焼いて……愛してきた。我々はそれを忘れない。それに──あなたが少なくとも只者ではないことは、古参なら理解している。我々を見くびらないでいただきたい。我々はそう易々とはあなたを手放しませんよ」
カポはドンの手の甲にも口付ける。
「死神があなたに連れ添っているのなら、我々はそこからあなたを寝盗ってみせます。我々の裏切りにご注意ください。特に『楽に死ねた』と思えた時なんかはね──」
霊幻はきょとんとする。不覚にもフリーズしてしまった。
「はいはい、会合はお開きな」
固まる霊幻の代わりにコンシリエーレのエクボが手を叩いて終わりを告げる。
「詳しいことは各カポに個別に打ち合わせる。極秘任務だ、極力部下に教えんなよ」
かあああああ、と顔を赤くして俯く霊幻をカポたちがちらっと見てはそわそわした顔をして出て行く。
こいつのこういうとこズルいよな、とエクボはどこか忌々しい気持ちで眺めていた。可愛い、という本音を押し殺して。

※

「最後のはナシだろ……ありゃあ反則だ」
「お前本当にストレートな好意に弱いよな」
執務室に戻ってから、固まった霊幻が動けるようになるまで３０分かかった。
「心拍も発汗も嘘をついてなかった。ああいうのは、自分の嫁さん

に言ってやれよ……」
「……お前さん、心拍なんて聞いてたのか？」
「ん？ああ、まぁ、聞こえるからな」
「……」
ドンにあてられた手紙を金属探知機を通して犬に嗅がせてから開封していたエクボが黙り込む。
エクボは、霊幻が『ミエーレ・ヴィリーノ』……伝説の暗殺者ではない（・・）、と思っている。
（そもそもミエーレの噂がシチリアで出回ったのは４０年も前だ）
この田舎のチョウミ・チッタ（市）では昨日のことのようにミエーレのことが囁かれているが、流行りがシチリアより遅れて来ているだけである。裏社会の噂は余程のもので無い限り公共の電波には乗らない。言ってしまえばたかが１暗殺者の噂、一般人からしたら明日の気温より関心が低い事柄だ。だからこそシチリアから離れてしまえばこれだけ遅れるのだ。
（霊幻はミエーレを名乗るには、若すぎる）
――だからこそ。
こいつはなんなんだ？とエクボは興味を引かれて仕方がない。
それとも。
（ミエーレは変装の達人だったと聞いている。まさか、歳を誤魔化して……？）
「お……っと。なかなかすごいものが来てるぜ、霊幻」
思考を中断してエクボは霊幻にチェックが終わった封筒を投げ渡す。
その豪華な封筒の宛先は『愛しのミエーレ・ヴィリーノへ』と書かれていて。
差出人は、ネオ・チオード（爪）・ファミリアのコンシリエーレからだった。
「だからだーれがミエーレだよ。髪の色と肌の色だけで言いやがって」
うんざりしながらも霊幻はその熱烈なセクハラ満載のラブレターを読む。
「ま、そういう夢を見たいなら見せてやろうじゃねえか。……ちょ

うどいい。ちょっとつついてみるか」
霊幻は香水の振られたその封筒を器用に指の上でくるくると回しながらめんどくさそうにそう言う。
「芹沢を呼んでくれ」

※

チョウミ・チッタで１番豪華なホテルに呼び出された霊幻は、護衛に芹沢を連れてネオチオードファミリアのコンシリエーレに会いに行く。
華美な内装のＶＩＰルームでは、やに下がった中年男が霊幻を待ち構えていた。
「やあ、やあ、ドン・アラタカ。会合に参加してくれて嬉しいよ」
ソファーから立ち上がった中年男が霊幻の手を両手で握って撫でくりまわす。ぴり、と芹沢の周りの空気が能力を帯びて弾けた。
「芹沢」
にこりと笑って目配せする霊幻に、分かってます、と芹沢は頷く。
今回はなるべく穏便に。そう言い含められていても、『飼い主』に無遠慮に近づく人間には、キバを剥きたくなるのはもう芹沢の本能に近くなっていた。
同じく能力者のネオチオードファミリアのコンシリエーレは、芹沢を見てひくりと喉を引き攣らせる。
芹沢は解体前のチオードファミリアでは、声を掛けることも許されない上位のカポだったからだ。
元々他のマフィアで下位のカポをしていたコンシリエーレは、マフィアの世界に不慣れなチオードファミリアの残党を上手いこと口車に乗せて再度かき集めて、その上にまんまと乗っかった男だ。
野心も高く、頭は回るだろう、と霊幻は思う。
だが色狂いはいただけないな、と会談だと言うのに自分の隣に座った中年男がふとももを撫で回し始めたのを見下ろす。
「単刀直入に言おう。お前ら、我らのドン──スズキ・ショウの居場所が知りたいだろう？」
ぴく、と霊幻の目の端が震える。

「そうやすやすと教えるわけにはいかないが──もしあの伝説の暗殺者『ミエーレ・ヴィリーノ』がウチのファミリアと仲良くしてくれると言うのなら、教えることもやぶさかではない」
──この田舎でそれだけの戦力とのコネを持つというのは、野心家にはさぞ魅力的に映るだろう。
「ふうん。なるほどな。……お前は俺がミエーレだと思っているのか？」
霊幻が挑発的に唇を引き上げる。
コンシリエーレは舌なめずりをして霊幻をソファーに押し倒した。
「それを調べるために今日は来てもらった」
「ン……」
コンシリエーレは霊幻に口付けて舌を追いかける。
「抱けば分かるだろう」
ベストのボタンを乱暴に外して、シャツを引き出して肌をまさぐった。
「……ん、はぁ……っ」
一介のファミリアのドンが押し倒されて暴かれている倒錯的な光景に、コンシリエーレの護衛は赤面して凝視していたが、芹沢が噛みつきそうな顔をして睨んでいたので慌てて目を逸らした。
「なんだ……こんなものか……やはり偽者か……？」
コンシリエーレは霊幻のズボンとボクサーパンツを奪いながらつぶやく。
「はぁっ、はっ、はぁっ」
性急にズボンから逸物を取り出して霊幻を犯そうとするコンシリエーレを。
くす、と霊幻が嘲笑う。
「お前……っ」
その態度にカッとなったコンシリエーレが慣らしもそこそこに性器を打ち込む。
「あ……っ」
目を見開いて霊幻が衝撃に身悶えた。
その反応にコンシリエーレは気を良くする。
「男を知っているのか。そんなに感じていたら仕事にならないので

は？」
「あっ、あ、あぁっ、あ」
挿送に必死に耐えて見せる霊幻の性器は反りかえって、ポタポタと先走りをこぼしていた。
霊幻を思いのままに感じさせることができたコンシリエーレは口角を思いっきり上げる。
「……このあたりか？」
性器で腹側を探るコンシリエーレに霊幻が鋭い声を上げる。
「あっ！？そこは……っあん！」
焦ってコンシリエーレを押し返そうとする手を一纏めに捕らえて、コンシリエーレは見つけた霊幻の弱点を思いっきり突き上げる。
「ああああっ！やめ、やめろっ！」
涙目の霊幻の足が空を蹴る。
征服感に背筋をゾクゾクさせているコンシリエーレは、ガツガツと前立腺をえぐり続けた。
「ああっ……あ、あ！イく……っ」
びゅる、と霊幻が腹に精液を吐き出す。
「くっ、締まる……っ」
「ぐう……っ」
中出しの屈辱に、悔しさと快感で流したであろう霊幻の涙に。
コンシリエーレの目は釘付けになった。
『能力』が弱いためにファミリアの中で馬鹿にされがちな日頃のストレスが、その涙に溶けていくような感覚。
「は、は、は、ミエーレ・ヴィリーノも組み伏せてしまえば、ただの男娼なのか？」
コンシリエーレは精一杯平静を装って、ティッシュで体液を処理していく。
「お前が偽者だとしても、そちらのファミリアと仲良くしたいのも本音だ。……また会談の席を設けよう」
霊幻も服を整えて涙をぬぐう。
「……分かった」
気まずそうに霊幻は部屋からそそくさと退出する。
その態度に、満足そうにコンシリエーレは鼻息を鳴らした。

※

「さて、かかったかどうか」
「え？」
屋敷に戻ってから、霊幻はあごに手を当てて芹沢に漏らす。
「なるべくあの男好みの男娼を演じてはやったが、勝率は五分五分ってところだな」
呟く霊幻の手を、芹沢はぱしっと掴む。
「あ、あの……」
「ん？どうした」
あの中年男に抱き乱される霊幻を見て、芹沢もたまらなくなっていた。
「霊幻さん……」
いつものように口付けようとして、ひょいと霊幻に避けられる。芹沢は壁のモナ・リザのレプリカにキスするはめになった。
「芹沢ぁ、もよおしたんなら娼館行くかバーで女口説くかしろ。お前なら女が靡かねえってこたぁないだろ」
「……やらせてくれないんですか？いつもは抱かせてくれるのに」
はぁ、と霊幻は小さくため息をつく。
「あれは人を殺したご褒美だ。殺しってのは仕事の中でも最高に嫌な部類だからな。そこを頑張った部下を労ってただけだ。ほら、離せ」
いつでも抱けると思っていた人を。
突然取り上げられたような気がして、芹沢は手を離せなかった。
「いやだ」
ぶち、と芹沢の見えない首輪が綻ぶ音がする。
「俺は今、アンタを抱きたい」
霊幻はその音に──心から歓喜した。
「駄目だ。お前は俺を自由に抱ける立場じゃない。……どうする？諦めるか？」
「……っ、いやです！い、いくら払えばいいんですか？」
「悪いけど非売品なんだよなぁ」

ぽすん、と霊幻は芹沢に抱きついて耳に口を寄せる。
「俺をレイプしてみるか？」
驚いた芹沢がはく、と空気を食む。
「お前が今、俺を抱くにはそれしかないぜ？さあ、どうする？」
じ、と。
手に入らないと言われて初めて霊幻への恋慕に気が付いた芹沢が霊幻を睨め付ける。
「レイプします」
「はは――いいぜ、受けて立つ」
ひゅか、と。
鉄板の仕込まれた革靴で顎を蹴り上げられて、ぐら、と芹沢はバランスを崩した。
「……っ、この……っ」
「ほらほら、早く捕まえないと逃げちゃうぞ」
くるりと身体をひるがえして鬼さんこちら、と芹沢を煽る霊幻に頭を振ってキバを剥き出しにする男に霊幻は嬉しくなる。
ぶちぶちと首輪が千切れていく音がしていた。
「いいぞ、欲しがれ、芹沢。お前が欲しいのは命令なんかじゃない」
芹沢が伸ばした手をひらりと踊るようにかわす霊幻。
「いい生活、でけえ家、高い車、美味い酒、そして――」
ぱし、と掴まれた手首をそのままぐいっと引いてワルツを踊るように霊幻は芹沢にたたらを踏ませる。
「とびきりのオンナだ！のし上がれ！悪党になって、有象無象をかしずかせて、それでやっと手に入るご褒美だ！」
くるくるとステップを霊幻にエスコートされて踏まされている芹沢が唸り声を上げて『能力』を使おうとしたので、霊幻はするりと芹沢の肩に手を回して。
ごきん、と外した。
「……っ！？ぐぁああっ！！」
「お前ら能力者は繊細な能力の調整は手を使わないと駄目だろ？」
反対側の肩も外されて、芹沢はひざをついて呻き声をあげる。
「能力者なら簡単に無能力者を好きにできると思ったら大間違い

だ」
「……ちくしょう……」
ぐしゃりと顔を崩して芹沢は悔し涙をこぼす。
「ヤりたい、ヤりたい、ヤりたい……！」
「うん」
「あなたを組み敷いて、今すぐその穴にぶち込んでやりたい……！」
「うん」
首輪が崩れて消えていく芹沢を優しく霊幻は見守る。
「のし上がってやる……！必ず手に入れてやる！！」
「うん」
「霊幻さんを跪かせて、ペニスに奉仕させて、俺のベッドに沈めて──」
もはや、芹沢を支配するものは首輪ではない。
「俺の愛を乞わせてやる──！」
欲望だ。マフィアに最も必要で、そしてマフィアを破滅に追い込むそれを手に入れた芹沢は『犬』から抜け出した。
霊幻は腰を屈めて、芹沢と目を合わせる。
「──欲しがれ」
それが全ての原動力だ。
そう言いたげに霊幻は芹沢に深く口付ける。
「！？ふぐっ、んんっ、」
突然与えられた甘いご褒美に、もっと、と舌を伸ばした芹沢からすいっと霊幻は身体を引く。
「お前が俺をとりにくる日を楽しみにしてるよ、芹沢」
昂らされるだけされて、放置されてしまった。
はあ、と芹沢はため息をついて。
「──見ててくださいよ」
いてて、と立ち上がり、外された肩を嵌めてもらうために病院に急いだ。

※

「霊幻、お前、芹沢に何かしたか？」
執務室で手紙のチェックをしながらエクボがふと霊幻に訊ねる。
「突然人が変わったみたいに行動しだして、正直、助かってるんだが」
「セックスを拒んだ」
ああ、とエクボは合点がいったと頷く。
「欲しがらせたのか。犬からマフィアになったんだな、アイツ」
「そゆこと」
そいつぁ助かる、とオーバーワーク気味のエクボが楽しげな声を上げる。
「しっかしホントにお前はファミリーに甘いなぁ？これまで通り『犬』にしておいた方が、お前には都合が良かっただろうに」
「そういうの、趣味じゃねぇんだよ。飼うなら本物の犬が飼いてぇし」
エクボは肩をすくめる。
「マフィアのくせに、欲のないこって……ん？まあた来てるぞ、この趣味の悪い封筒」
エクボが投げた手紙を指先でくるくる回しながら、ニヤっと霊幻が笑う。
「どうやらクソまずい高級魚が釣れたみたいだ」

１日と空けず届いたその封筒は。

ネオ・チオード（爪）・ファミリアのコンシリエーレが、『霊幻を忘れられない』と堕ちたことをあらわす証拠だった。

続